大洗応援隊! ほげほげカフェ

ボランティア
地域交流

代表者：教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育コース　２年
小野寺　藍

連携先

大洗町役場、髭釜商店街、曲松商店街、
ＮＰＯ法人「大洗・海の大学」

顧問教員

伊　藤　哲　司〔人文学部　教授〕

参加者

山　田　智　弘（人文学部　4年）
斎　田　菜　穂（人文学部　3年）
塚　田　千　尋（人文学部　3年）
伊　賀　一　穂（農学部　2年）
大　宮　友理加（人文学部　2年）
小野寺　　藍（教育学部　2年）
実　方　くるみ（人文学部　2年）
柴　田　裕　輝（理学部　2年）
白　土　可奈子（人文学部　2年）
吉　松　智　哉（工学部　2年）
上　野　嘉那子（人文学部　1年）
後　藤　愛　理（人文学部　1年）
後　藤　早貴子（人文学部　1年）
小　林　裕　美（人文学部　1年）
佐　藤　玖美子（人文学部　1年）
沢　村　浩　平（理学部　1年）
塩　原　理　花（人文学部　1年）
篠　崎　仙　一　人文学部　1年）
根　本　雄　輝（工学部　1年）
ハ　ク　　翔（人文学部　1年）
春　里　桃　子（人文学部　1年）
比屋根　利　紀（人文学部　1年）
舛　田　清　夏（人文学部　1年）
宮　本　　香（農学部　1年）

プロジェクトの申請内容

はじめに
〔「大洗応援隊！」とは〕
昨年３月11日の東日本大震災を受け、その後結成されたネットワーク組織。昨年の震災で大洗町は津波を始め深刻な被害を受けた。そのような状況の中で、大洗町の復興のために何かしたい、大洗町を元気にしたい、そのような思いをもったひとたちによって結成されたのがこの大洗応援隊！である。
これまで大洗応援隊は地域内外の様々な人たちとワールドカフェという情報共有を目指した全員参加型会議を開き、震災当初の状況やその経験を経て自分たちが見つけた課題や目標について語り合うなどの活動を行ってきた。その他にも、昨年の夏に大洗で行われた茨城県音楽祭にスタッフボランティアとして参加したり、県外から大学教授をお招きし防災に関するワークショップを開きさまざまな考えや知識を共有する活動をおこなってきた。
　現在は、そうした活動を通して得た知識や考えを形にしていくことを目指して活動している。そして、活動をより盛り上げていくために学生で集まって週に２回学生ミーティングを行ったり、実際に現地に足を運び、大洗

の町の状況について自分たちの目で見て確かめる活動などを行っている。

これまで大洗応援隊！は、平成24年７月14日には髭釜商店街、21日には曲松商店街で行われたイベントにボランティアとして参加させていただくなど、普段の活動から地域の商店街と密接なつながりがあり今回のプロジェクトの連携先としてもこころよく引き受けていただいた。

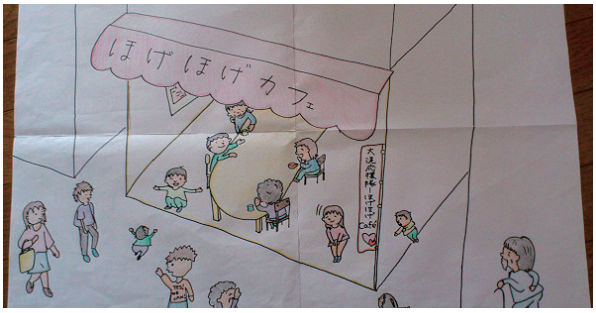
プロジェクトの概要

大洗町では、商店街の利用者数が年々減少、町の経済を支える基盤としてかねてから商店街の活性化が課題とされてきた。そして、昨年3月の震災をうけ、その必要性があらためて浮き彫りになった。その商店街のひとつ、髭釜商店街は昭和40年代まで約40軒の商店が連なる賑わいのある通りだった。しかし現在では大型店舗の地域参入や病院、郵便局の閉鎖に従い歩行者の数が減少し、加盟店舗数も昔の約半数の25店舗となってしまった。現在、大洗町の各商店街ではその復興をめざして独自の取り組みが計画・実行されている。

このプロジェトは、とくに大洗町・髭釜商店街と連携し、震災後につくられたネットワークである「大洗応援隊！」に所属する学生を中心に、地域住民が集い、情報交換や交流を行うにぎわいの拠点としての「ほげほげカフェ」を立ち上げるものである。商店街の取り組みと協働し、髭釜商店街の空き店舗の有効活用と商店街周辺のコミュニティの再生をめざしてこのプロジェクトを行っていくものとする。また災害につよいまちづくりを目指すという視点も導入する。

「ほげほげカフェ」は７月から店舗の内装準備を始め、周囲への認知を図る取り組みを行うと同時に住民へのアンケートを実施、ニーズをさぐりつつ９月以降の運営を目標に取り組んでいくものとする。運営は毎週末に行う。

なお「ほげほげ」とは、「心置きなく、たっぷりと」という意味の大洗の方言である。



「ほげほげカフェ」完成後の町のイメージ

◆連携の方法・内容◆

髭釜商店街から空き店舗を借用、その場を使って人びとが交わることができる場としての「ほげほげカフェ」を運営する。大洗町役場をはじめ他の組織と連携する下地はすでにできており、空き店舗の借用もできることになっている。なお「大洗応援隊！」のメンバーは、facebookを使って常時連絡をとりあっており、学生のみならず大洗町、さらには茨城県内外の様々なフィールドで活躍する人びと約97名で構成されており、多様な人びとの協力を得ることができる環境がすでに整っている。

◆活動予定内容◆

・学生の有志団体によるパフォーマンス
・地域住民を講師としてお招きし、暮らしの知恵講座や趣味を活かしたパフォーマンス
・大学の教授等をお招きしての防災に関するワークショップを行う
・大洗町のイベント等通知の広告、冊子等を置き、情報を得られるスペースを設置する
・毎月、学生の視点からまちの様子や魅力をつたえる広報誌を作成し、地域住民および町外にも配信する。

◆期待される成果◆

学生が関わる「ほげほげカフェ」を基点とした地域住民のつながりをあらためてをつくることによって、住民の関心を高め地域を活性化させることが期待できる。また、地域や住民同士が情報を共有する場の提供や、防災に関する知識を広める活動をとおして災害などの緊急事態に対しよりつよい町づくりの一助とすることもできる。

将来に向けて継続性のあるプロジェクトとなるように工夫することによって、今後より多くの学生が地域の活動に関心をもち、関われる機会をつくる。これに関わる学生は、その過程のなかで地域社会の動きにより強い関心をもち、そこを基点により広い視野を得ることが期待できる。

プロジェクトの実施概要

我々「大洗応援隊！」のモットーは、「自分たちだけのアイディアに偏らず、住民または町の取り組みに関する人々の声に耳を傾けながら日々取り組みを見直し次の活動につなげていくこと」である。

そのため、当初予定していたものと活動の内容が異なっている部分もあるが、イベント等に限らず通常の運営の中での気づきを大切にし、より住民の方が居心地良く交流を楽しめる場づくりを目指してプロジェクトを行ってきた。

◆ほげほげカフェ運営前◆

７月	・大洗町髭釜商店街の空き店舗清掃開始 ・髭釜商店街のイベント準備（七夕オーナメント、住民の方や大洗の風景を撮影）
７月	・髭釜商店街・七夕マルシェでのボランティア ・曲松商店街100円商店街でのボランティア
８月	・大洗町、八朔祭りでのイベント補助及びカフェの開放(休憩所)、アンケートの実施
９月	・「ほげほげカフェ」試験運営

店舗の準備の他、大洗町の商店街との連携を深める為に各イベントの際に補助としてイベントに参加させていただいた。イベントの主催者側に立って共に活動することは多くの住民の方と触れ合い町の雰囲気、住民側のニーズを探るばかりでなく、運営者側の思いや考えに触れることができ、町の現状把握やモチベーションを得る良い機会となった。

商店街の七夕飾りつくり

◆ほげほげカフェ運営後◆

10月	・ほげほげカフェ運営開始 ・大洗町の町報に掲載 ・髭釜マルシェ補助 ・茨城新聞に掲載 ・「いばキラＴＶ」に出演

11月	・大洗商工感謝祭、補助 ・大洗あんこう祭り、補助 ・カフェで町住民による民謡（磯節）のパフォーマンス
12月	・フリーマーケットの開催 ・カフェの内装大改造 ・髭釜商店街クリスマスマルシェ、補助
1月	・朝日新聞社、掲載 ・「おしゃべり広場　in ほげほげカフェ」の開催。（大洗国際交流課、茨城大学金本ゼミとの共同企画） ・茨城新聞、掲載 ・東京新聞、掲載

10月以降は毎週土日をめどに運営を本格的に始動。カフェの告知や町との連携を強めることを目的に、10月以降も大洗町及び商店街のイベントに補助として参加。広報活動として町の防災無線（大洗町のすべての住宅に取り付けられている無線）を利用した宣伝やビラ配り、店舗前での呼びかけを行った。

住民からの意見をもとに自分たち独自でイベントを企画、実行することができた。

◆地域参画プロジェクト終了後◆

2月	・茨城放送でのラジオ出演 ・茨大アコスティックギターサークル“Gitarre”によるパフォーマンス
3月	・髭釜マルシェ、補助 ・防災ゲーム「クロスロード」の実施（京都大学防災研究所、矢守教授をお招きして行う。日本質的心理学会共催）

我々の取り組みはプロジェクトの期間をもって終了するものではなく、継続的に活動していくことでより確かなコミュニティーの基盤をつくること念頭に始動したものである。よって、地域参画プロジェクトは1月で終了したがその後もカフェの運営及びイベント等の取り組みを継続して行っている。

プロジェクトの成果報告

◆プロジェクトによる主な成果◆

●ネットワークづくり

〔組織としての人脈〕

これまで、「大洗応援隊！」はそれ自体がネットワークであるという性質上、メンバー内でも多種多様な専門性をもつ方々が相互に働きあってきた。しかし、今年度のプロジェクト開始後は個人レベルで町の活性化に努める住民の方や大洗町内外で地域の復興支援を行う組織などと新たにつながりをつくることができた。

情報の開示としては、facebookの公開ページに「大洗応援隊！ほげほげ広場」を開設。カフェの運営状況や活動報告、また、大洗町のイベント情報などを掲載した（これは、町の情報の広報活動という側面ももつ）。

自分たちの取り組みを知ってもらう上で最も効果的だったのは色々なイベントで運営の補助を行ったり、商工会と共同で露店を出させていただいた際に直接運営関係者とお話させていただくという、face to faceの取り組みである。その際に案内のビラをお渡ししたり（このビラはイベントに来られた住民の方にも配布した。）カフェについて紹介した。また、町のイベントにはイベント関係者以外にも役場、観光業、地元企業等の役職をもった方が顔を出すことも多い。そうした機会を利用して色々な方と顔合わせをさせていただく

ことで我々の活動をアピールし、興味を持っていただくことができた。

また、「大洗応援隊！」に所属する学生メンバー個々がもつネットワークを利用して、そこから全体へとつなげ協働していくこともあった。

以下、新しくできた人脈の一例である。

・水戸観光協会
・ＪＩＣＡ
・大洗町イベント情報メーリング（個人で行っている。このメーリングリストに参加することで大洗町のイベント情報とカフェの運営状況を互いに共有・発信している。）
・障害者福祉施設「つくし」

〔カフェ内の住民同士のネットワーク〕

カフェ内の住民同士のネットワークをつくるためにまず取り組んだことは、人々が集える場の提供と集うためのきっかけづくりである。住民にカフェを身近なものとして認知してもらうために、カフェそのものの雰囲気作りについても何度も検討しては改善を行った。はじめは来客者としてカフェに訪れた人が一緒に話し合いや改装作業に参加してくださったりと、活動ひとつひとつにもカフェから生まれたネットワークを活かすことができた。また、カフェ宣伝のビラをイベントの際に配布したり商店街の他の店舗に置かせていただいた。店舗前では学生メンバーが通行人に声をかけて入りやすい雰囲気づくりにつとめた。Face to faceでのやりとりは質問しやすいということもあり、そのおかげで立ち寄ってくださった方もいた。

集うためのきっかけづくりとして、イベントを企画・実行した。

また、住民間で口コミが広がり訪れてくれた方も多かった。

こうしたひとつひとつの取り組みが功を奏し、少しずつではあるが来客数が増加。「久しく会えていなかった友人に会って話すことができた。」「ここに来ると若い人たちと話せるから、楽しいよ」と、我々が目的としていた集いの場としての機能、世代間交流をたのしむ方々からの声も届いている。

このような組織としての、そして住民同士のつながりをつくることができた原因のひとつに、我々の活動が単発的なものでなく継続的に行われてきたからだという点があげられる。継続的に活動してきたからこそ得られた信頼は大きく、商工会、そして住民の方々からも評価の声をいただいている。学生自身、半年間にわたって商店街や町の取り組みを間近に見られたことは町おこしの苦悩や課題に触れ、今後の活動を方向付ける良い機会となった。

●大洗町の情報広報

Facebook公開ページ「大洗応援隊！ほげほげ広場」でのイベント情報の掲載の他、カフェの一角に町のイベント情報やマップなどのチラシや冊子を置くスペースを設置した。町に住んでいても見逃してしまう情報もあるらしく、「今度こんなイベントがあるのか。じゃぁ行ってみようかしら」と住民が声をかけあう場面もあった。

当初予定されていた学生による情報誌の作成、配布はカフェ運営の他の作業に予想以上に労力を費やしてしまったために実行することができなかった。

現在は外部から得た情報源をそのまま設置しているにすぎないが、今後はカフェが町の情報発信の場としてより機能していくように学生であたらしく情報誌または掲示物をつくるなど、情報の提示の方法にも工夫したい。

●防災に関するワークショップ

ワークショップに関しては、連携先との教

授とうまく都合を合わせることができず、プロジェクト期間中に実施することができなかった。しかし、平成24年３月９日には京都大学防災研究所矢守教授をお招きして防災ゲーム「クロスロード」を実施することが決まっている。また、学生メンバーの中には「クロスロード」を体験したことがある人もおり、今後はその知識を活かしたゲームや展示物をカフェ内に設置できないか現在検討している。

昨年12月に大洗での地震が再び頻発していた時期には、カフェに集った住民同士が情報のやり取りや3.11の時の震災を振り返り互いに気づかい合う場面が見られた。このように集いの場としてのカフェが存在することは、震災当時の傷を癒したり暮らしに密接した情報を住民が主体になって交換する場としても機能していると考えられる。

●各イベントの実施

住民がカフェに集うきっかけづくりのためにイベントを実施した。イベントは不定期に行われたが、これは商店街のイベントとの兼ね合いやイベントに協力してくれる住民の方と日程を調節したからである。

プロジェクト当初から学生の団体（または個人）によるパフォーマンスを企画、数団体にオファーを出したが予定が合わずプロジェクト期間内には実現することができなかった。しかし、平成24年２月16日には茨城大学アコスティックギターサークル“Gittare”を呼び音楽イベントを実施することができた。こうして町の取り組みに学生が参加することで、学生が町の取り組みに触れ、地域自治について考えたり愛着を持ってくれることに期待している。今後も参加団体を増やしていけるよう調整を行ってく予定だ。

イベントのなかには、住民の方が自ら手を挙げ大洗町の伝統民謡「磯節」を披露してくださることもあった。我々が活動を行う目的のひとつに、「住民による住民のための自治」を生み出すきっかけを与えるという点がある。住民間の自治を生み出すのは他でもない住民自身であり、そのための環境づくりが我々の役割のひとつなのだ。住民一人ひとりがもつ個性。この会のイベントは、その個性が「ほげほげカフェ」という環境があって活かされた一例である。今後も住民をはじめとした町づくりに携わる方々と歩調を合わせて環境づくりにつとめていきたい。

民謡「磯節」のパフォーマンス

12月に行われたフリーマーケットは住民からの要望から生まれたものである。この日は一日で47名と予想以上に多くの来客者が訪れ、このことをきっかけに「今度はカフェに遊びに行くわ」と言ってくださる方もいるなど、にぎわいづくりと今度につながる収穫を得ることができた。

１月に行われた大洗国際国流部と金本ゼミとの共同企画「おしゃべり広場 in ほげほげカフェ」では普段は交流のなかった外国人の方と住民の方が交流する場面をみることもできた。また、カフェ全体も活気にあふれ商店街に良い風を流すことができた。今後も定期的に共同で実施していこうという話がもちあがっいる。その場合の実施経費はどのように捻出するかなど、話し合いをすすめるべき課題もある。そのことを踏まえつつ、前向きに検討していきたい。

「おしゃべり広場 in ほげほげカフェ」
餅つきの様子

カフェが運営してからの約半年の間に「ほげほげカフェ」では様々な取り組みが行われた。そのひとつひとつが来客者から称賛の声をいただいている。また、こうした学生の取り組みをみて商店街の方が自ら手伝いを名乗り出てくださったり、住民の方が色々な提案をしてくださったりと、積極的に関わりをもとうと動き始めている方は徐々に増えてきている。しかし、そうしたことも事実である一方で、うまく宣伝が行えず効果を活かしきれていないという反省点もあった。それぞれの取り組みの目的を実施すること自体に終結させないためにも、事前の準備の取り組み方について見直していきたい。

●外部評価

我々のプロジェクトは今年度開始ということもあり、プロジェクト参加者自身も周りからどのような反応を得られるか不安を抱えながらのスタートとなった。しかし、今回のプロジェクトの拠点でもある髭釜商店街が今年度茨城県商店街コンペの最優秀賞を受賞したこともあり、「ほげほげカフェ」の活動も取材陣の目にとまり取材していただくことができた。はじめは商店街の取り組みと合わせての取材であったが、プロジェクト後半には「ほげほげカフェ」を独占で取り上げていただくことができた。このようなメディアへの露出は「ほげほげカフェ」の認知度を高めるだけでなく、来客数の増加から人の流れを生むことで商店街全体の活性化につなげられると考える。実際に「さっきカフェに立ち寄ったという人が、私の店にも来てくれたよ」という嬉しい声を商店街の方から頂いている。

メディア出演は以下の通りである。

メディア名	掲載日・出演日
茨城新聞	９月12日、10月23日、１月28日
茨城放送	２月５日
いばキラＴＶ	10月24日
東京新聞	１月28日
朝日新聞	１月15日

災害時助け合おう
大洗の応援カフェ
茨大生ら
餅つきで
異文化交流

商店街で路上朝市
活性化コンペ最優秀
大洗

大洗の街 笑顔に
交流カフェ好評
茨城大生ら企画 空き店舗活用
毎週土曜 世代超え来店者

メディア出演の様子

●今年度得られたもの

約半年にわたって継続的に活動してきた中で、住民、商工会はじめとした町おこしに携わる方々、そして学生メンバーとの間に信頼関係を生むことができた。商店街を利用する人の劇的な変化は得ることができなかったが、学生が町の取り組みに参入することそれ自体が町に活気を生み商店街の方々に良い刺激を与えられたのではないかと考える。長期的運営の中で、自ら手伝いを申し出る商店街及び周囲の住民の方が徐々に現れ、ものを寄付・貸出や、店舗の改装への助言、看板作りの協力、「ほげほげカフェ」の暖簾の作成と提供など、その方法は人それぞれだがカフェ運営時には毎週顔を出してくださる方も多くなり、学生だけでなく町の方々に支えられての「ほげほげカフェ」なのだということを実感している。その分、町からの期待も大きくい。カフェを単なる集いの場としてではなく、その上の機能、コミュニティーの再生、地域の活性化、そして防災につよいまちづくりの場として機能していけるようこれまでの活動を振り返りさらなる発展につなげる努力をしていきたい。

●今後の展望

今年度は、ネットワークの構築という面で一番成果を上げることができた。しかし、現時点ではそのネットワークを活かしきることができていない。情報の拡散ばかりでなくカフェないでの取り組みをより充実していけるようにこれまで構築されてきたネットワークを見直し、連携の可能性について考察していきたい。

また、カフェが単なる開かれた場としてではなく当初の目的でもある①コミュニティー再生②地域の活性化③防災につよい町づくり④世代間交流の場として機能してくように、普段の活動一つ一つの意味づけをしっかりおこなっていきたい。

「大洗応援隊！」としては、ほげほげカフェの運営をとおして得た認知度・ネットワークを活かし町全体の活性化のために自分たちにできる可能性を探っていきたい。

こうした学生、そして社会人との取り組みが町おこしのモデルケースのひとつとして発展していけると期待している。